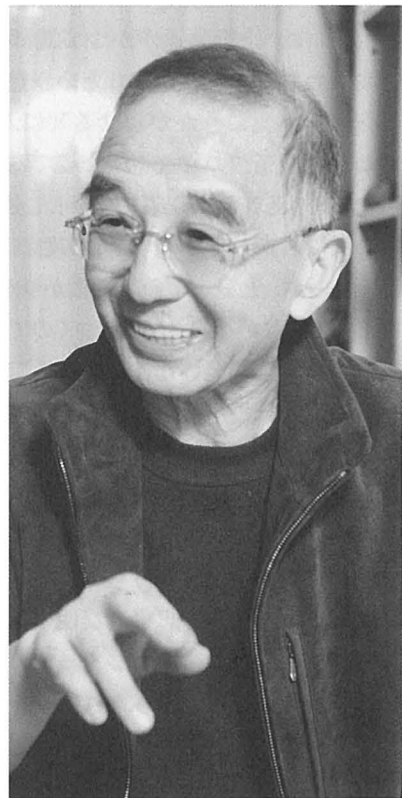


この人に聞く

大中 恩 氏に聞く

聞き手…森田信一



大中 恩氏プロフィール

1924年東京に生まれる。父は作曲家でオルガニストの大中寅二。東京音楽学校(現東京芸大)作曲科卒業。1955年に中田喜直氏らと5人で「ろばの会」を結成し、2000年3月の解散まで、子どものための音楽の創作と発展に尽したことにより、1958年と1961年に芸術祭賞受賞。1957年より1987年まで30年間、自作品のみを演奏する合唱団「コール Meg」を主宰。歌曲の分野では、1961年に「第1回歌曲の夕べ」を開いて以来、歌曲作品を精力的に発表。合唱作品については、混声合唱曲「煉瓦色の街」で第21回芸術祭奨励賞(1965年)、女声合唱組曲「愛の風船」(1966年)、男声合唱曲「走れわが心」(1968年)、混声合唱曲「島よ」(1979年)で芸術祭優秀賞を受賞。1982年には「いぬのおまわりさん」「サッチャん」「おなかのへるうた」等を集大成した「現代子どものうた秀作選・大中恩選集」で日本童謡大賞を受賞。1989年紫綬褒賞を受賞。

聞き手

森田信一／富山大学教授

森田▼本日は、お忙しいところ、貴重なお時間をありがとうございます。いろいろとお話しをお聞かせください。

まずは子どもの歌から

森田▼最初に、大中先生といえば、「いぬのおまわりさん」「サッチャん」「おなかのへるうた」「バスのうた」といった、子どもの歌で広く知られていると思いますので、その辺のお話からうかがいたいと思います。

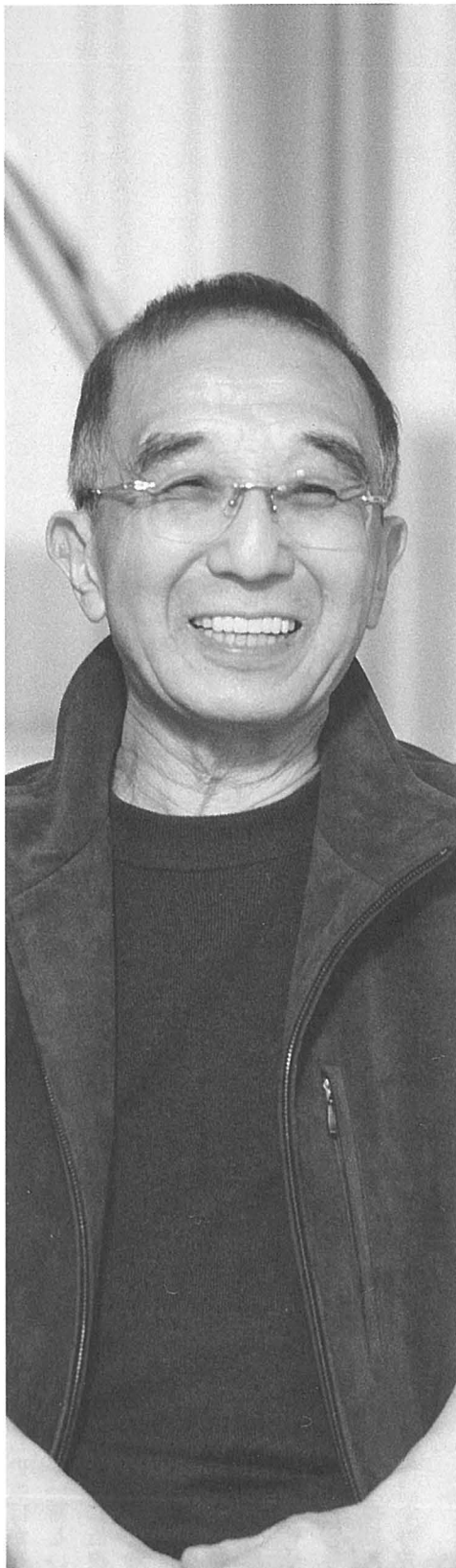
大中▼私は昭和二十年に学校を出ました。二十年に終戦になって、軍隊を除隊になって復員しました。それからまもなく卒業したわけです。赤坂の二丁目に家がありました。自宅の近くにNHKがあり、そんな関係もあって、すぐにNHKの仕事を始めました。

子どもの歌は、それから十年後に始めたんです。昭和三十年に、東京音楽学校の二級上の中田喜直さんに誘われて、「ろばの会」というグループ活動を始めたのです。これは作曲家から詩人に呼びかけ

て、「新しい子どもの歌」を作ろうという運動です。それまでは、童謡という言葉に抵抗があったのですが、「新しい子どもの歌」という中田さんの提唱に、賛同し参加しました。

中田さんに誘っていただいたことは、大変感謝しています。そうでなければ、子どもの歌を書くこともなく、劇伴などをずっとやっていたかもしれませんね。

一昨々年に亡くなった中田さんの命日の五月三日に「水芭蕉忌」というコンサートが毎年行われて



ますが、今年のプログラムに文を書かせてもらいました。そこで「賢兄愚弟」という言葉を使いました。

中田さんには、いろいろなことについてたしなめられたり、怒られたりしていたものだから。(笑)

森田▼「ろばの会」は、中田喜直、中田一次、磯部徹、宇賀神光利とい

う先生方と大中先生の五人で結成されたのですね。「ろばの会」の活動は、二〇〇〇年の解散まで、長く続いたとうかがっています。

大中▼そう、宇賀神さんは、かなり早い時期に亡くなりましたけどね。

森田▼そうですね。宇賀神先生だ

けお名前を存じ上げませんでした。早くにお亡くなりになっていたのですね。

大中▼中田一次さんも、一昨年に亡くなられましたが、お嬢さんの順子さんも、「ろばの会」の終り頃には、よく歌っていただいていた。

歌曲・合唱の仕事を中心に

森田▼そうしますと、学校を出られてからの活動は、まず合唱だったのでしょうか。

大中▼歌曲と合唱で仕事を始めま

した。歌曲は、二年上の畑中良輔さんに勧められたのです。中田さんや私に、日本の歌を作るようにと。

森田▼先生のお仕事は、歌の仕事が中心になっているのですね。

大中▼そうですね、私は人間の声に関心を持っていました。それが音楽を始めたきっかけでもあるのです。

私は、両親ともクリスチャンでして、父が霊南坂教会のオルガニストで、母がその幼稚園の保母をしていました。そんな関係で、教会が遊び場になっていて、賛美

歌を聞くということから私の音楽が始まりました。

森田▼お父様は「椰子の実」で知られている大中寅二先生ですね。

大中▼そうですね。父も教会で音楽に出会ったようです。父は次男だったのですが、長男が亡くなっていたので、家業を継ぐべき立場だったのです。そこで同志社大学の経済学部を出たのですが、どうしても音楽をやりたくて、山田耕筰先生に弟子入りして音楽を始めました。自分が家業を捨てて音楽家になった人ですから、常々、男は親の言う



直筆楽譜（女屋靖子作詩・大中恩作曲「銀の雨」）

ことなど「はい、はい」と聞いてい
るようでは碌な者にならないとよく
言っていました。子どもの将来を強
制するべきではないという考え方
でした。「親に孝、君に忠」の時代
だったのですけどね。

父は童謡についても意見があり、
これを素直に認めなかった人なの
で、私もなんとなく童謡という言葉
には抵抗がありました。

森田▼戦前の作曲家の方々は、クリ
スチャンが圧倒的に多かったと思っ
ますが。

大中▼そうですね。「海ゆかば」で
知られる信時潔先生は私の恩師で
すが、この方も牧師さんのご子息で
した。教会以外に、西洋音楽の刺
激を受ける場がなかったということ
でしょうね。

森田▼新しい子どもの歌には、戦前
の「赤い鳥」運動の影響はあるので
しょうか。

大中▼それはあるでしょうね。同じ
ような子どもの歌運動なのです。

「赤い鳥」は、詩人の方からの
発案で始まりましたが、「新しい

子どもの歌」は、磯部俣さん、中
田喜直さんなどを始めとした、作
曲家からの呼びかけで始まったの
です。

森田▼「ろばの会」は、童謡では
なくて、子どもの歌という呼びか
けだったのですね。

大中▼そう、「新しい子どもの歌」
という言葉にインパクトがあつて、
中田さんに賛同したのです。童謡
という言葉にはやはり抵抗があり
ました。

サトウハチローさんが童謡協会
というものを作りました。サトウ
ハチローさんが亡くなったあと、
中田さんが童謡協会の会長になっ
たとき、私が「そんなことはやら
ないほうがいいですよ」というよ
うなことを言うと、中田さんは
「やるわけにはいかないんだよ、
君。世の中というものはそういう
ものじゃないんだ」と言っていま
した。

子どもの歌は大切なんだと思っ
ます。曲からも歌詞からもいろい
ろな印象を受けますから。昔の童
謡は、どちらかというと、女の子

に向くような、やさしい歌ばかり
だったように思います。「新しい
子どもの歌」では、男の子にも楽
しく歌えるようにということを考
えました。そんな中から「おなか
のへるうた」「いぬのおまわりさ
ん」などができてきました。

子どもの歌を始めるときに、ちょ
うど大阪の朝日放送をやめた、従
兄弟の阪田寛夫を誘ったのです。

森田▼「サツちゃん」の作詞家の方
ですね。

大中▼うん、彼にとつて「サツちゃ
ん」は、初めての子どもの歌の歌詞
でした。続いて彼と一緒に「おなか
のへるうた」も作りました。

「おなかのへるうた」では、歌
詞の中の「かあちゃん、かあちゃ
ん」という言葉が、はじめNHK
で引っかかりました。でも、やが
てそのまま歌われることになり
ました。（笑）

コールメグについて

森田▼私は学生のころ、合唱サーク
ルに入っていたのですが、「コール



「Meg」という合唱団が名を轟かせていたことを覚えていますが。プロの合唱団という印象を持っていました。「コールMeg」についてお聞かせください。

大中▼「コールMeg」は、昭和三十二年に始めて三〇年間やりました。もともと合唱が好きだったので、すでに昭和二十一年から合唱団を作って活動していました。それが九年目になったときに、「十年やったらやめられなくなるから」と言って、やめると宣言しました。

しかしその後、団員から、またやりたいという声が上がってきました。そこで「もしやるならば俺の曲しかやらないよ」と言って了解してもらい、「コールMeg」という合唱団を結成しました。

この活動で一番大変だったのは、次々に新しい曲を作らなければならなかったことで、毎週の練習と追いかけてきました。この三〇年の活動で私のほうも何かが鍛えられたように思います。音楽の面だけでなく、人をまとめること

なども含めた合唱活動のやり方や、人間関係の面でしょうか。

「コールMeg」は、練習を月・水・金の週三回、午後六時から九時までやっていました。その結果たくさん曲が出来ました。これは団員にとっても大変な活動だったと思います。週に三回、夕方の六時に集まらなければならなかったんです。そしてまた、これには変な付録もついたんです。三〇年間で、なんと五〇組以上のご夫婦が生まれました。

森田▼それは多大な功績と言えますね。

大中▼週に三回も練習があるものだから、ほかでお付き合いする暇がなかったのでしょうか。(笑)

昭和四十七年には、一五年目を記念して、九夜連続演奏会をしました。二五年目には、北海道から九州まで日本縦断演奏旅行をしました。

森田▼いろいろな面で多くの成果を生んだわけですね。三〇年やって、やはり先生のお考えで区切りをつけられたのでしょうか。

大中▼ええ。三〇年たったとき、記念演奏会をやりました。それが土曜日のことです。翌日の日曜日にはOB・OGが三百人以上も集まりました。そして、その翌日の月曜日の定例の練習のときに、今日でやめると宣言しました。

「コールMeg」は、報酬をもらう仕事としてやっていたのではありません。月・水・金と、週三回練習をしていたので、病気のときでも休まず参加して指導をしてきました。だからその日には、仕事を絶対に入れず、いつも私が最初に練習場所に行っていました。

ある時、「コールMeg」を評して、中田さんが「さして人格高邁ならざる大中君のところに、どうしてあんなに人が集まるのだろうか」と、大変おもしろくある雑誌に書かれました。僕の合唱活動を見ていてくれたのだなと思っていられなかったんですが、その後直ぐに、中田さんから電話があって、お母さんに怒られたそうです。ああいうことを言うものではない、まし

「大中恩歌曲の会」プログラム



て文章としては書くものではないと。(笑)

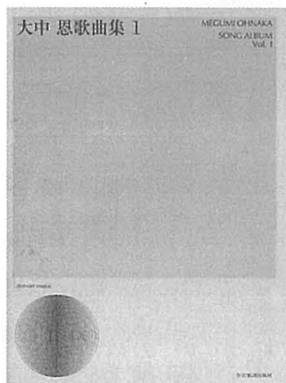
今、また合唱団をやりたいと思ってもね、あのころのようにはできないのに、やはり同じようにやりたくなってしまいます。

最近の合唱活動

森田▼昭和三十二年から三〇年間というと、ちょうど高度成長期に重なる時期でしたが、今、合唱活動はどうなっているでしょうか。

大中▼今は、うまいところはすごくうまくなっている。コンクールを指してレベルは上がっているでしょう。一方、今また、それよりはみんなで楽しもうという方向へ向っているのではないのでしょうか。アカペラ

「歌曲集1」の表紙



なども流行っていますね。僕たちが六〇年ぐらい前にやっていた時代がちよつと立ち返っているのではないのでしょうか。合唱を楽しもうという風潮も出てきているように見えます。合唱で楽しむようなことは、僕らが始めたのではなかったかな。それまでは、合唱はまじめに歌うというのが普通でした。

森田▼最近では合唱活動はやられていないのですか。

大中▼「コールメグ」のOB・OGの連中の希望で、やめて一〇年目ぐらいから、月に一回集まってやっています。九州、関西、東北から集まってきました。今年も、十月にその人たちと演奏会をやります。それには月一回ではどうかというところで、今は月に二回の練習

をしています。

森田▼本財団は生涯音楽学習がテーマですが、先生のやってこられた合唱活動は、団員の人たちにとつて、まさに生涯学習と言えますね。

大中▼生涯学習というようなことを、じっくり考えてやっているわけではないんですが。

森田▼たくさんさんの歌曲や合唱曲や子どもの歌を作られてきているわけですが、詩の選び方などはどのようなになさっているのですか。

大中▼そうですね。私に何か長所があるとすれば、良い詩を見つけた能力があるということかもしれません。歌えるということを第一に考えて、詩をさがしています。

たとえば寺山修司さんの詩二三遍に曲をつけた「ひとりぼっちがたまらなかつたら」が、昨夜の演奏会でも、バリトンの田中純さんによって全曲演奏されました。

昨夜は、寺山修司ファンという人たちも来て下さっていました。彼らの選んだ寺山さんの詩には、彼ら寺山修司ファンの知らないよう

な詩も入っていたようです。

森田▼そうですね。寺山修司という、何かオドロオドロしいイメージのものがよく知られていますよ。

大中▼そうですね。しかし僕の選んだものは決してそういうものではないと思います。そういう未知の詩を歌として聴いて涙が出たという感想もありました。

森田▼私も、寺山修司の詩の世界に、そういう広がりがあるとは知りませんでした。

さて、このころはシルバーエイジの方々の合唱も盛んですが、生涯学習として見たとき、高齢者の方の合唱について、なにかアドバイスはございますか。

大中▼指揮者があまりえらくなくてしまつてはよくないですね。どんな音楽を与えてあげたらよいかかわかり、やさしく対面するという指揮者が望ましいでしょうね。

森田▼先生は、いろいろな場でのご指導の経験が豊富でいらつしやいますよ。

大中▼二、三年前まで、ある女子



高に行って合唱の指導をしていたのですが、彼女らは、合唱を高校時代の活動としてだけ考えていて、卒業したらもうやらないというような風潮があります。

クラブ活動をスポーツのように捉えているのでしょうか。合唱というものを、その後もうまく続けていくことはむずかしいのでしょうかね。

歌曲集の出版について

森田▼最近、歌曲集を出版されましたね。

大中▼全音楽譜出版社から出ました。作曲活動をはじめたころは、楽譜の出版などについてはあまり考えなかったのです。それではいけないですね。作曲家は、もう少しそういうことまでを考えるべきなのですね。

森田▼「歌曲集Ⅰ」となっていますが、何集まで出されるご予定ですか。一〇集ぐらいまで。

大中▼いやいや、そんなにはどうでしょうか。しかしまず、第二集

は出したいですね。

森田▼こういう歌曲集を出されることで、多くの声楽家が先生の作品を知って、コンサートで取り上げることも増えるでしょうから、どんどん積極的に出版していただきたいと思います。世代を超えた若い人たちへの啓蒙にもなると思われます。

大中▼私は、卒業して以来、五〇年ぐらい母校（東京芸術大学）に行ったことがなかったのです。最近になって、大学院生などの要請があり、去年はじめて芸大を訪れました。それで、若い仲間ができました。

昨日の演奏会にも、そういう仲間たちがたくさん来てくれました。ああいう若い、これからの人たちともつながりを持てるようになってよかったです。

森田▼今日は、貴重な時間をありがとうございました。これからの先生のますますのご活躍をお祈りしています。

（二〇〇三年四月二十八日 大中 恩先生宅にて）